

文学に見る“浮浪・人夫・野垂れ死”

—詩人・高木護の作品世界と宗教倫理—

金子 昭

人間はすぐれて語り部である。人が目的、大義、理想、使命などを探し求めるのは、主として、基本的には意味もなければ、雛型もない人生の物語の展開に、筋書きと手本を見出そうとするからにはほかならない。／人生をひとつの物語に転じることは、われわれに対する他人の関心を高め、他人とわれわれとを結びつける一手段である。

—エリック・ホッファー Eric Hoffer(1902-1983)『魂の錬金術』(作品社)より

*アメリカの社会哲学者・港湾労働者。7歳の時に失明、15歳の時に突然回復。正規の学校教育を一切受けていない。18歳で天涯孤独に。さまざまな職を転々とし、28歳の時、自殺未遂を機に季節労働者になる(その後、67年まで港湾労働者)。公立図書館にて独学で勉強。51年から著作活動を始め、「沖仲仕の哲学者」として知られる。

—————【目次】—————

はじめに—全体の研究会テーマとの関わりにおいて

- (1) 人間の死生観はいつ変容するのか？
- (2) 宗教倫理という“枠組み”の中でどう捉えられるか？

1. 漂泊の文学の系譜の上での詩人・高木護

- (1) 漂泊の文学の系譜の中の高木護
- (2) 高木護の著作と人生の年譜

2. 詩的言語における“ライフストーリー(自分語り)”

- (1) 語られた世界に自分も身を置くこと
- (2) 作品世界の中の“浮浪・人夫・野垂れ死”

3. 「人間」になるという修行

- (1) 人間一人夫=0(マタハ死)
- (2) 高木護の作品世界における死と生(性)

おわりに—3.11以後にどう生かされるか

はじめに—全体の研究会テーマとの関わりにおいて

- (1) 人間の死生観はいつ変容するのか？
 - ・直接の被災者でない限り、震災によって突如、死生観が変容するというもでもない。
 - ・わが国の「漂泊の文学」の中で受け継がれてきた死生観がある。
- (2) 宗教倫理という“枠組み”の中でどう捉えられるか？
 - ・語りの言葉は、狭い意味での宗教倫理の学術言語では捉えきれない。

- ・詩的言語を通じて説き起こされる、独特な宗教と倫理の世界がある。
 (例) 釜ヶ崎の詩人たちへのインタビュー (soul in 釜ヶ崎編著『貧魂社会ニッポンへー釜ヶ崎からの発信』アットワークス、2008年)。

1. 漂泊の文学の系譜の上での詩人・高木護

(1) 漂泊の文学の系譜の中の高木護

- ・日本文学の漂泊の文学の系譜：西行から始まり、芭蕉、良寛、井月など、旅に生き旅の内に死ぬ一連の詩人の系譜がある。現代のホームレス詩人にもつながる。
- ・高木護が挙げている人物より (『人間浮浪考一野垂れ死の系譜』、1973年)
 木喰上人 (江戸時代) 住まいの小屋の脇の穴の中で死亡、冬を越して発見された。
 種田山頭火 (明治 15～昭和 15 : 58 歳) 俳人：放浪と行乞の末、草庵で亡くなる。
 長谷敏男 (明治 45～昭和 38 : 53 歳) 詩人：泥酔して保護された病院で死亡。
 辻潤 (明治 17～昭和 19 : 61 歳) 作家：居候先の友人宅で餓死。
 尾形亀之助 (明治 32～昭和 17 : 43 歳) 詩人：下宿の一室で衰弱死。
 宗不早 (明治 17～昭和 17 : 59 歳) 歌人：阿蘇にて消息を絶つ。数カ月後、遺体で発見。
 尾崎放哉 (明治 18～昭和 15 : 42 歳) 俳人：酒で身を持ち崩し、小豆島の寺で結核死。

(2) 高木護の著作と人生の年譜

① 高木護の主な著作

- 『放浪の唄一ある人生記録』大和書房、1965年 (エッセイ集)。
- 『高木護詩集』五月書房、1974年 (詩集)。
- 『高木護詩集 (日本現代詩人叢書第 90 集)』芸風書院、1983年 (詩集)。
- 『人間浮浪考一野垂れ死の系譜』財界展望新社、1973年 (エッセイ集)。
- 『川蟬』風書房、1974年 (初期小説集)
- 『人夫考』未来社、1979年 (エッセイ集)。
- 『木賃宿に雨が降る』未来社、1980年 (エッセイ集)。
- 『なんじゃらほい』未来社、1981年 (エッセイ/詩集)。
- 『野垂れ死考』未来社、1983年 (エッセイ集)。
- 『忍術考』未来社、1984年 (小説)
- 『穴考一穴からうまれて穴に還る』未来社、1985年 (小説)。
- 『愛』新評論、1985年 (小説)。
- 『人間畜生考』未来社、1988年 (エッセイ集)。
- 『現住所は空の下』未来社、1989年 (エッセイ集)。
- 『爺さんになれたぞ!』影書房、2004年 (エッセイ集)。

* 高木護の研究書など

- 『虚無思想研究』第 10 号「特集・詩人 高木護」、『虚無思想』編集委員会、1993年 6 月。
- 澤宮優『放浪と土と文学と一高木護/松永伍一/谷川雁』現代書館、2005年。
- 青柳瑞穂『詩人 高木護一浮浪の精神史』脈発行所、2012年。
- 『Myaku』第 14 号「特集・きみは、詩人 高木護を知っているか」脈発行所、2012年。
- 志村有弘『のたれ死にでもよいではないか』新典社新書、2008年。

②高木護の年譜表

*「高木護自筆年譜」(『虚無思想』第10号)及び青柳(2012:164-170)に基づき作成。

1927年(昭和2年)	0歳	熊本県鹿本郡山鹿町にて生まれる。2男5女の長男。
1939年(昭和14年)	12歳	父の転職などで8回ほど転校の後、山鹿町小学校を卒業。
1942年(昭和17年)	15歳	山鹿実業学校を卒業。福岡市の丸善博多店に就職。
1944年(昭和19年)	17歳	三重県鈴鹿の気象連隊を経てシンガポールに軍属で派遣。
1945年(昭和20年)	18歳	マライ州で現地入隊。その後、レンパン島で抑留生活。
1946年(昭和21年)	19歳	復員して帰国。両親は既に亡く、弟妹5人が残されていた。
1947年(昭和22年)	20歳	山の中に炭小屋を作り、そこで暮らす。その後、弟の家の居候、土方や農家の日雇取りをする。『詩と真実』の同人になる。
1949年(昭和24年)	23歳	いろいろな職業を転々とする。ガリ版詩集『裏町悲歌』を刊行。松永伍一編の『交叉点』に参加。九州の作家・詩人との出会いがある。後、短編小説、詩、童話を書くようになった。
1954年(昭和29年)	27歳	詩集『夕御飯です』を刊行。*20代は創作活動が盛んだった。
1955年(昭和30年)	28歳	放浪を始める。野宿をしながら九州一円を歩き、その後、筑豊の炭鉱住宅の廃屋に住み、ボタ山のガラを拾って暮らす。
1959年(昭和34年)	32歳	谷川雁と森崎和江のサークル村の居候をした後、翌年から八幡で「人夫」業を遍歴、北九州の労働下宿を転々とする。
1962年(昭和37年)	35歳	ノロの下敷きになり全身打撲になる。
1963年(昭和38年)	36歳	労働下宿を追い出され、浮浪者暮らしに。11月、『週刊女性自身』が「本誌が発見した放浪詩人」として特集を組む。結婚希望が殺到、その中から北九州出身で東京で看護婦をしていた女性と結婚する。⇒これが人生の転機に
1964年(昭和39年)	37歳	結婚して上京。妻に養ってもらいながら、執筆活動を始める。
1965年(昭和40年)	38歳	『放浪の唄』、詩集『夕焼け』を刊行。 *安定した生活の中で以後も次々と作品を発表。
1969年(昭和44年)	42歳	『辻潤著作集』全6巻別巻1を編集。
1980年(昭和55年)	53歳	『木賃宿に雨が降る』、詩集『天に近い一本の木』。読者から、電話で「あんた、人夫やったことがあるかい」と説教される。
————	————	————
2013年(平成25年)	86歳	

*“浮浪・人夫・野垂れ死”に関わる内容は、18歳のマライ半島行きから38歳の結婚・上京までのものである。

2. 詩的言語における“ライフストーリー(自分語り)”

(1) 語られた世界に自分も身を置くこと

(a) 語られた世界と現実の世界—どちらが“真実”か?

詩的世界は事実ではないが真実である。自分を語るとは、自分を騙ること。

⇒フィクション(虚構)。しかし、ライフストーリーの作品世界(テキスト)の

中に、読者はまず身をおいてみることに。

- (b) あくまでも文学作品であり、この作品世界で描かれたメッセージは逆説的な問題提起として読むことが大切。内容を“真に受けて”、じっさいに放浪したり人夫になったり野垂れ死にしたり、ということを勧めているものではない。なぜなら高木自身はそうした生活を脱して、安定した定住の暮らしになったからこそ、これらの作品が書けたのだから。(ここで取り上げるのもその時期の作品である)。
- (c) 書くことによるフィクションのほかに、書かれないフィクションも確かにある。高木の場合、妻の堅実な仕事で好きな文筆一本の生活が送れている。
⇒ 韜晦趣味のために逆に現在の自分を描くことはできない。生活感が希薄になったほか、熊本の同人誌作家から東京に出て自由に書くことができた“幸運”は、書きにくい。作品の大半が回顧的な小説・エッセイになっている。
- (d) 高木の作品は、外部から被せられた種々の形容(「援助を必要とする人」の福祉社会学的位置づけ、「社会的弱者」などの人権論的位置づけ、「小さくされた人」などの宗教的聖化)をひきはがし、なんとか内側から“浮浪・人夫・野垂れ死”における人間という存在の尊厳を語ろうとする。あくまで等身大の人間を描く試み。
- (e) 貧しさ、孤独、弱さ、先の見えない不安などは、すべて乗り越えなければならぬマイナスの側面なのか。そのようなものを抱えつつ、今あるがままの人間の尊厳を語る言葉が必要。それは社会福祉の言葉でもなく、保健・医療の言葉でもなく、人権論の言葉でもなく、宗教学・社会学の言葉でもなく、文学の言葉である。

本発表では、それゆえ詩人・高木護にその作品世界から語ってもらうことにする。

・ 作品世界を生き活きとする要素⇒「対話」

人間と語る、自分自身とも語る、自然と語る、死とも語る。

⇒「ぼかん」とすることによって、限りなく自分自身を解き放つ。そこに、いろいろなものの語りかけが聞こえてくる。

「ぼかんとしていると、そこら辺の風景がじつに鮮やかに見えてくる。木も、草も、小石も、空も、雲も、風も、日向も、小鳥たちも。どのように見えてくるかというと、木は木のごとく、空は空のごとく見えてくる。風の吹き様も見えてくるし、彼らのおしゃべりだって聞こえてくる。

『おれ、ここに立っているんだよ』/木がいう。

『あたしだって、ここに座っているわ』/小石がいう。

『ぼくは寒くなるにつれ、迷ってしまうのだ。でもね、吹かせないと、ぼくの商売は上がったから、みなさんごめんなさいよ』

風がだれともなくいう。済まなそうな声である。』『人間畜生考』(104-105頁)

- ・ 人夫として生きる生き方は、高木の場合、詩と小説・エッセイの中に描かれる。
- ・ 人夫という職業につく一実生活ではそこから足を抜いた。(Cf. 青柳 2012 : 143)
* 「足抜き」が出来なかった人が今、釜ヶ崎や山谷にいる。しかし、彼らは文学の言葉として「人夫の生き方」を語るができない。その一端を語れるのは、高木のような作家である。

「わたしは、いかなるドン底の人夫生活だって、底があると思う。ズルズル落ちっぱなしの、底なし沼ではない。/底があるとしたら、本人の心だ。

愛も、誠も、自覚も、その心の一部だと思う。何か一つの心があったら、どんなドン底の人夫生活だって、足が洗えぬことはないだろう。」 『放浪の唄』より
・「人夫」について書くことについての高木のひとり対話（自問自答）

「——それなら、おまえは、人夫を何年やってきたというのか。

答え=合わせて二〇年ばかり。」

「——おまえが人夫だったのは認めてやるとして、おまえに、他の人夫たちの心が判るというのか。

答え=判らない。判るものか！ おのれのことさえ判らないのに。

——ならば、「人夫」について何一つ語れないだろう。おまえが人夫だったことを勘定に入れても。

答え=判らないから、おのれの「人夫」をさらけ出して、おのれはこうだったし、仲間もこうだったようだといっている。それなら、許されるのではないか。判らないからこそ、「人夫」の生態を眺めてみたいのだ。」

「——それで？

答え=人夫をやってみて少しだけ判ったが、人夫こそ人間の原形というか、人間丸出しといえそう。おのれの人間を、ありのまま丸出しにしてやらなければ、人夫はやっておられないよ。

——おい、少々褒め過ぎ、美化し過ぎだぜ。

答え=そうかな、そうは思わないよ。では反対に聞きたいが、人夫で人夫以上に仕上げた者たちがいるか。先生にも大臣にも役人にもならないし、欲たれの証しである勲章も貰いはしないだろう。第一に欲たれ病に罹ったら、人夫なんか一日だってやっておれないよ。」
『人夫考』（106-108 頁）

宿の唄（『高木護詩集』105-107 頁より）

おけらのかんちゃん/四十男
土方が十年/穴掘り五年に人夫が十年
ええと/ご破算で願いましては/人夫も土方も同じかねえ
親方 やっぱり銭貸しなっせ——
雨が降るので/おけらのかんちゃんしあわせもの
一ばいはおみきのつもり/二ばいはあしたの力の素のつもり
つもりがつもって/三ばい/四ばい/ああ 酔っぱらった

おけらのかんちゃん/着たきり雀
生まれも不明で名も忘れた

おけらのかんちゃん/柄にもなく
人夫の小頭を夢見て寝小便たれた

(2) 作品世界の中の“浮浪・人夫・野垂れ死”

・70歳になった高木自身の人生回顧—晩年にこうした境地を味わえる幸せがあった
「とうとう定職には就けなかったけれど、日雇いの日よう取りもやったし、仕事にあぶれて拾い屋さんもやったし、ただぶらぶらもやったし、浮浪者もやったし、野宿もやったし、子分役やどやさ（殴られ役もやったものである。ついでにいえば、山の中に迷い込んだり、何日も食べ物にありつけなかったり、お寺さんや穴っぼんに泊めてもらったり、行き倒れさんになりかかったり、かんじんさんに面倒を見てもらったり、廃墟の炭住や空き家のお世話になったり、残飯のごちゃ煮の雑炊にありついたり、人間たちに追い立てを食ったり、捕まって木にくくりつけられたり、着ていた物を剥ぎ盗られたり、土下座をさせられたり、食べ物や銭をめぐんでももらったり、人夫集めのアンちゃんの甘言に引っかかったり、タコ部屋まがいの飯場で働かされたり、出水に流されたり、途方もない大きな松茸を見つけたり、海の群れていた魚を手掴みにしたり、かんじんさんと間違えられたり、雪の日に見ずをかけられたり、ネコ屋さんとか盆栽用の木屋さんとか呪い屋さんとかと出合ったり、山仕事でようやく得た金をインチキ賭博で巻き上げられたり、飴玉二つで行商の手伝いをさせられたり、やくざさんの子分になったり、ニセ坊さんになったり、山のお寺の瀧で打たれてみたり、泥棒さんと道連れになったり、三年奉公の作男として売られそうになったり、墓場を寝所にさせてもらったり、何日も人さまたちと合わなかったりものをいわなかったり、海がうたう唄にうっとりさせられたり、夕焼けに思わず手を合わせたくなったり、山ん道で出合ったお婆さんの肩を叩かせてもらったりもしたものである。

アホアホ、ボケボケ、ノロマノロマと自分を罵ってやるだけでも、胸の間（つか）えが取れたようなすっとした気持ちになってきて、身も軽くなってきたものである。

いろいろな目に合ったが、いろいろな目に合って、たのしかったな。

おもしろかったな。／うれしかったな。／悲しかったな。／浮き浮きしてきたな。／手を合わせたくなくなったな。／いろいろな目に合わせてもらって、感謝したくなかったな。」
『爺さんになれたぞ！』(251-252頁)

○人間ってなんだろうね。人生ってなんだろうね。さっぱりわからないまま、爺さんになってしまったよ。

○なんにもなれなかったが、やっとなんか爺さんになってしまったよ。

『爺さんになれたぞ！』(251-252頁)

(a) “浮浪” — “浮浪”とはぶらぶらの「行」である—欲があってはできない

「浮浪は放浪ではない。放浪は旅みたいなものだが、浮浪はぶらぶらである。風に吹かれて揺れているものごとくで、ぶらぶら歩くというよりも、ぶらぶら揺れながら、ぶらぶらと日を送ることである。そういう者たちを浮浪者という。

浮浪者たちといえど、はなからぶらぶらであったわけではあるまい。(中略) 家を出る。目的みたいなものがあるなしにしろ、ことがうまく運ばない。そこで不義理を重ねたり、夢をなくしたり、人間嫌いになったり、すべてのことになんともなく大義になったり、ふつうのくらしを諦めたり、絶望したり、自暴自棄になったり——などし

ているうちに、家かたむらから消息を絶つことになる。こんなところからぶらぶらははじまるのかもしれない。」
『野垂れ死考』(62-63 頁)

「わたしが出逢った彼らはみんな心やさしき人たちで、頭に馬鹿がつくぐらいの正直者たちでもあった。世の中の邪魔にならないように、人様の迷惑にならないようにと心がけていた。また世智辛い世の中に背を向けることで、落伍者といわれるならいわれる自分の、負け犬といわれるならいわれる自分の、生きて行ける場所を見つけ出していた。そして彼らは飢えと死と紙一重のぎりぎりの、その日くらしを信条としていた。

ぶらぶらは「行」みたいなもので、並み大抵ではやれない。ぶらぶらを少しでも怠けたら、欲が出てくるだろうし、欲が出てきたら、切りがなくなってくる。よほど心を律しておらなければ、ぶらぶらなどやっておれまい。世間ではたかが浮浪者だというけれど、浮浪や浮浪者の何かを熟知してのことだろうか。」『野垂れ死考』(78 頁)

- ・ただし、「ぶらぶら」の浮浪暮らしでも、完全な「無縁」ではない。どこかで「有縁」と地続きとなっている。Cf.宮本常一「世間師のこと」、『忘れられた日本人』(岩波文庫)。
- ・浮浪はしていても、物貰いはしない。ちゃんと稼いでいる。親切な家や宿で世話になっても、長逗留はしないで、そこから出て行く。⇒生きるモラルとして
- ・現在は、都会でも田舎でも、浮浪者・無縁者というアウトローを受け入れる素地が消えてしまった。ホームレスに対する市民社会の距離感はきわめて大きい。

「昭和二十九年から、三十三、四年ごろにかけて、九州一円をぶらぶら歩いたことがある。旅といえば旅。放浪といえば放浪。浮浪といえば浮浪。ルンペンぐらしともいえるし、乞食ぐらしともいえるし、ぶらぶらぐらしともいえた。本人のわたしから言えば、ぶらぶらといったほうが一番びたりとくるような気がする。

どこどこまで行きたいという行く先があるわけでもなく、何かしてみたいという当てがあるわけでもなく、ただのぶらぶら歩きだった。疲れてきたら、きたところで足を投げ出した。眠くなったら、眠くなったところころがった。景色がいいところがあったら、そこに腰をおろして、何日でも飽きるまで眺めた。腹が減ったら、持っている食べ物を食べた。食べ物がなければ、木の実や何かの根っこや草を食べた。そんなもので我慢しきれなくなったら、行き当たりばったりの農家に頼み込んで、二日や三日、百姓仕事の手伝いをさせてもらって、代わりに米、麦、からいも、味噌、梅干しなどの食べ物をもらった。

そして、またぶらぶらと歩きつづけた。」 『現住所は空の下』(159-160 頁)

「人家があったら、頼み込んで何か手伝いをさせてもらって、代わりに食べ物をもらうつもりだった。そのつもりでいても、家によっては犬ころなんかのように、「あっちへ行け！」と追っ払われたり、「手伝ってもらうような仕事はないよ」と断られることもあった。そんなときは「自転車の掃除をさせて下はり。掃除賃はにぎりめし一つでも、半分でもよかですけん」というと、「自転車をな」とたいていの家は掃除をさせてくれた。(中略)

手伝ってもらうような仕事はないといった家も、自転車の掃除ぶりを見て、二、三日手伝ってくれないかという出す家もあったので、わたしにもできるような仕事なら、気持ちよく手伝わせてもらった。」
『野垂れ死考』(168 頁)

(b) “人夫” — “人夫”とは「ないない尽くし」の中で生きること

- ・反時代的職業で最低収入。何とでも紙一重ということ。死の海に生の小舟をのん気に浮かべて、ゆらゆら揺れていることでもある。
- ・人夫には位がない。10年やっても人夫、20年やっても人夫、ただの人間一匹。
- ・からだ以外には何もなし。家もいない、妻子もいない。
- ・停年や歳がなく、からだは丈夫ならいつまでも働ける
- ・人夫こそ人間の原点⇒「食って、働いて、寝て—というのが人夫の一日の行為であるが、人間世界においてこれ以上の哲学・真理がまたとあろうか」

『人間浮浪考—野垂れ死の系譜』(208-209)

「ジイさんは一息ついて、「生まれたときから、人夫をしよるごたる。人夫はな、この世の中から運悪く扱われてしまった者たちかもしれん」と考え考えいった。「運悪く」というのは、人夫をやっている者たちにしか判らない、感じられない心かもしれなかったが、なるほどである。人夫たちは仲間以外には、滅多なことがなければしゃべらなかつたし、心も開かなかつた。そのせいか、世の中はこの無口を無能や無脳と勘違いしているようだった。人夫ほど毎日おのれの体でもって考えごとをしている者たちはいなかつた。」

『人夫考』(142頁)

「人夫をやっていると、その大半が若死にした。もちろん、仕事上の事故もあったが、体を扱き使うので、ふつうの人並みの「寿命」を持っていたとしても、超スピードで擦り減って行くようだった。運よく若死にを免れたとしても、人夫をつづけておれば、いつかは働けなくなってくる。人夫が働けなくなったときは、死を意味するのだった。わたしは何人かの年老いた人夫たちと出逢い、仲間にしてもらうこともあった。なかには、人夫の神様みたいな者たちもいて、若い者たちよりも、倍も三倍も働ける者もいるにはいたが、たいていは寄る年波には勝てず、よろよろよろつきながら、「はよ、お迎えがこんかいの」と念仏のように唱えていた。」

『人夫考』(197-198頁)

- ・ここに登場する人夫たちは、高齢になって生活保護で暮らすなどは夢にも思っていない。そのように暮らす現代の単身高齢者にはある意味で主体的に生きるモデルがない。それゆえ、第三者からは、支援・寄り添いの対象者として見られる。

(c) “野垂れ死” — “野垂れ死”もまた人間になる修行の一つの結果である。

- ・ここに宗教倫理的なものをあえて見出そうとするならば、飄々と浮浪する中で、自らを律していこうとする姿勢である。一人なら一人分で生きるのが人間のあるべき姿。最後が野垂れ死に終わったとしても、人間になる修行の結果であれば、それもまた良しと見なす。⇒人間になる主体的な生き方への「覚悟」を問いかける。

「行き倒れのほとんどが浮浪者たちで、身元不明が多いとのことである。性別に分けると、これまたほとんどが男たちであるという。

行き倒れで死んで逝った人たちを、一概に野垂れ死だとばかりはいえないかもしれないが、野垂れ死の同類には違いなかつた。死んで逝くまでの理由はともあれ、自ら「いのち」を絶たなくとも、死ぬ心構えというか、意思があつたかどうかが問題であろう。ここでは死んで逝くにしても、その心構えや意思のある者たちの死を、野垂れ死にとしたい。」

『野垂れ死考』(62頁)

「行き倒れになるにも、野垂れ死をするにも、「時」というものがあるはずじゃ。人間になる修行をして、人間の道を歩き、もっとも人間らしく生きた上で、しっかりと覚悟を決めて、あの世逝きをしなければならないだろう。食えないから、病気で苦しいから、この世が厭になったから、悪いことをしたから、淋しいから、悪いやつに騙されたから、裏切られたから、夢をなくしてしまったから、生きて行く自信がないから、なんとなく死にたくなかったから、なんて死んで逝くやつは、理由はともあれ、たとえ死の結果が行き倒れや野垂れ死にであったとしても、そんなのはただの死ではない。わしらが心に大事に仕舞い込んでいる行き倒れや野垂れ死には、ただの死ではない。「生」の世界が差別だらけだからといって、腹いせに「死」の世界まで差別するのではないぞ。この世に人間としてうまれてきた者なら、人間になる修行をやらなければなるまい。これは当たり前のことじゃ。うまれつき、神様や仏様のような者なら、いざ知らず、わしらみたいなできそこないの屑のろくでなしが、より人間であるためには、人間らしく生きて行くためには、心して修行をやるしかないだろう。より人間になる、人間らしくなる修行をやった上での覚悟の死こそ、わしらは行き倒れといたい。野垂れ死にといたい。」 『野垂れ死考』(107頁)

3. 「人間」になるという修行

(1) 人間一人夫=0 (マタハ死)

- ・「人夫」⇒「人間」である。自分の人夫体験を通じて得た境地
- ・人間とは「人間となること」ではないか。

「わたし自身が人夫だったので、人夫仲間の生き様も、おのれの生き様も眺めてきたような気がする。して、「人夫」に「人間」の原形というか、本来の姿を見たといったらどうだろう。人夫はどこまで行っても人夫だし、当然のことだがえらくもならないし、無名のままということが、より人間であることの証しといえそうである。人夫は欲や欲のようなものを身につけたら、一日だってやっておられないところがある。人間を丸出しにして、おのれを投げ出してやらなければ、やっておられないところがある。人よりもぬきんでてはいけない、むしろ一足遅れなければ、やっておられないところがある。(中略)

人夫を「クズ」「のろま」「落ちぶれ者」「うらぶれ者」「下等」「ヨゴレ」「サイテイ」「しようもない者」などと、あからさまに思っているものもいるらしい。/たしかにそんな一面も持っているには持っているが、それは人間丸出しのせいだろう。人はクズならクズ、サイテイならサイテイという言葉の字面だけを、そのまま丸のみにしてしまうようだが、実は人間らしさがその中に隠れているかもしれないのだ。」

『人夫考』(24-25頁)

「渡り人夫(飯場などを渡り歩く人夫のこと)たちの稼ぎは知れたものであろう。体を粉にして働いたところで、残るものはあるまい。残るとしたら、疲労と持病ぐらいなものだろう。そのことを仮に方程式のようなものにしたら、

人間一人夫=0 (マタハ死) /ということになりそうである。」 『人夫考』(26頁)

- ・では、そのような人間観とはどのようなものだろうか。
- ⇒ぶらぶら歩きながら自分に言い聞かせた「ぶらぶら訓」より

- 人並みになろうとか、一人前になろうとか思うな。
 - 人間のおまえも、この世の生きものの一種でしかない。けものたちも、虫も、鳥も、木も、草も、石も、仲間と思え。
 - 生きて行くには食べ物でもなんでも、一人なら一人分あればいい。
 - 何かのためになるとか、役に立つとか思うな。
 - 頭が弱いからといって、強くなってやろうと思うな。
 - 不器用だからといって、器用になってやろうとは思うな。
 - おまえは何もできないのだから、おのれ自身をさらけ出し、あるがままに生きて行け。」
- (『人間畜生考』216-217頁)

(2) 高木護の作品世界における死と生 (性)

(a) 生と性は密接な関係にある

生きているかぎり性と密接に関わる。底辺で生きる女性たちとの触れ合いと交流がある。社会秩序が整い過ぎた今日でも、そうした場面は形を変えて存在している。

「わたしたち人夫にとって、酒やおなごは空気ぐらいには、必需品のような気がしたからである。/それにしても、わたしは童貞でなかったことに、ほっとした。」

『木賃宿に雨が降る』(19頁)

「おなごは十七歳だといった。/よく働いた。/宿の人夫たちの洗濯物まで引き受けてくれた。たとえばオケラのカンちゃんや太郎さんやヒロやんたちの煮しめ色したシャツやフンドシまでが、曇天つづきから、ある日ひょっくりお天道様が出たように、マッシロケになった。

おなごはだれにでもやさしくしてくれるので、荒くれやヤケッパチや飲んだくれの人夫たちも、おなごのやさしい心根に戸惑いながらも、だんだん染まって行くようになった。/そうやって二、三カ月が過ぎた。(中略)

そんなある日のことだった。/宿から、おなごの姿が何の前触れもなしに消えてしまった。

『あたし/ほんとは ズベ公なの/ ごめんね』

という落書きが、数日後、わたしの所有のノートから見つかった。(中略)

宿の人夫たちは何事もなかったように、元の荒くれやヤケッパチや飲んだくれの日常に返って行った。」

『木賃宿に雨が降る』(26-27頁)

(b) 生/性を語る中で愛も語られる。

『好き合うてもの、夫婦になつてももの、大事なものは情愛だからな』

『盛りのうちはよ、気になるかもしれんがの、盛りを過ぎたらよ、助け合い、いたわり合いのほうがいいの』

一人の女のことばに、他の女たちは『ほんにな』というように合点した。(中略) 女たちは「情愛」こそが大事だといったが、情愛とは浜の部落で、みんなと仲よくしてのんびり、のん気にくらしながら、一生をおえることかもしれないと思った。

わたしは草むしりの手を休めて、背のびしながら、海を眺め、空を眺め、女たちのでっかいお尻を眺めているうちに、それをひっくるめたものが情愛であり、即ち「愛」ではないだろうかという気がしてきた。」

『愛』(260-261頁)

(c) 死者は回想の中で語られるだけではない。

- ・ただし、死を語っても、それは死とのたわむれの姿であり、眼差しは常に生に向けられている。

「人間だって生きもの。生きものたちは「生」と「死」との二つしかないが、「生」と仲よくしているよりも、毎日ちらつく「死」と仲よくしているほうが楽しかった。なぜかという、生きるということをちらっと考えただけで、はやくめしにありつきたい、寝床にもありつきたいということになってくる。めしにありついたらありついで、もっと食べたい、もっとうまいものを食べたいということになってくる。寝床にありついたらありついで、もっとあったかいところに寝たいとか、布団にくるまって寝たいとか、風呂につかりたいということになってくる。これらはすべて欲であって、あきらめたり、捨てたりしたはずの欲がむくむくと生き返ってくる。くるから、ぶらぶららしには「生」のことなどはあしたまかせ、風まかせ、成り行きまかせにして、ほったらかしにしておいたほうが楽である。それに反して、毎日目の前でちらつく死について思うのはたのしいものだった。はやく死にたいわけではなかったが、きょう死ぬかもしれない、きょう死ななかつたら、あした死ぬかもしれないと思っただけでも、はらはらしてくるし、弾んできた。」

『人間畜生考』(178-179 頁)

- ・「死」とも、ひとり対話の相手である。

『な、こげんもんでも、迎えにきてくれるかな』 / 死によびかけると、

『おまえはまだまだ……』 / 首を振った。

『勿体ぶらんで、はよう迎えにきなはり』

『きなはりというても、葬式金もなかくせに』

『そぎゃんとはなか』

『なかから、どげんするつもりか』

『死んでから先のこつは知らんたい。あとは野となれ、山となれたい』

『とんでもなかこつば、いうな。おまえみたいなぶらぶらもんが死んでも、だれかに迷惑ばかけるとばい』

『そげんじゃろうが、死んでしもうたら、しょうがなかない』

死といい合っているうちに、駅や公園のベンチにころがっていても、軒下や道端にころがっていても、眠りがきてくれた

『人間畜生考』(179 頁)

- ・死者への思い—「敗戦日」の季節になると坊主頭になり、8月15日は食を断つ。

⇒いつまでも忘れずに思い出し、自分なりの追悼の営みをするということ。弔うべき人たちはたくさんいる。そして3.11の死者たちもまた…。

「ことしも敗戦日の八月十五日を迎え、過ぎて行った。

毎年、そのころになると、わたしは坊主頭になることにしている。せめても、のうのと生きながらえている者の一人として、戦争犠牲者たちの冥福を祈るだけではなしに、戦後の浮浪仲間や人夫仲間で、死者になった人たちの霊を弔うためにもあった。そして、八月十五日は食を断つことにしている。一日だけだが、こんなのは本人の心の問題だから、やりたい人たちだけでやればいいわけであるが、ノド元過ぎればなんとやらで、戦争、戦死者（または犠牲者）、敗戦、食糧難、飢餓——

の時代を忘れている人たちが、あまりにも多い。悪夢として、憶い出したくないという人たちもおられるかもしれないが、敗戦の日の一日でもいいから、当時を偲び、死者たちの霊を弔ってほしいものである。」 『人間畜生考』(136頁)

・人間は穴から生まれて穴に還る生き物である—死生観から人間観、宇宙観へ

「わたしたち人間は穴っぼん中で、よろこんだり、怒ったり、泣いたり、笑ったり、苦しんだり、嘘をついたり、だまくらかしたり、だまくらかされたり、威張ったり、儲けたり、淋しがったり、はしゃいだり、ぶつぶついたり、あきらめたり、望みをつないだり、落ち込んだりしながら、くらしているかもしれない。(中略)

とはいえ、人間といえども生きものであるから、めぐまれているいないがあり、運不運があり、強い弱いがあり、差ができてくるだろう、そうしたら、めぐまれた者がいない者を助け、運のいい者が不運な者をいたわり、強い者が弱い者に力を貸してやるのが、穴っぼんくらしのルールのようなものであろう。(中略)

もっと大きく考えたら、宇宙そのものが穴っぼんだとしたら、わたしたち人間が住まわせてもらっている地球は、宇宙という穴っぼんをくるくるとさまよい、まわっていることになる。」 『穴考—穴からうまれて穴に還る』(239-240)

おわりに—3.11 以後にどう生かされるか

- (1) 高木護がよく読まれたのは、1970～80年代。日本社会は会社中心主義の社会だった。また「一億総中流」と言われていた。その中で、あえて「安定」した暮らしから脱落していくような姿勢が読者の共感をよんだ。時代風潮としても、「蒸発」という言葉や現象が流行った。当時は、釜ヶ崎など労働者の街も活況を呈していた。
- (2) バブル経済崩壊以後、日本経済は急速に悪化、非正規雇用が増大。2000年代に入ると格差社会、貧困社会、無縁社会という言葉が人口に膾炙されるようになり、孤独死が問題になった。釜ヶ崎なども、労働者の街から次第に高齢単身者の街、生活保護の街になっていった。人々は逆に「安定」を志向するようになっている。しかし、この窮状を改善しようとする社会倫理も打つ手に窮している。
- (3) 3.11以降、再びつながりや絆に人々の関心が高まった。(2)の時期を経験したことで、新たな形で人と人との「縁」をどのように結ぶかについての模索が始まっている。そうしたときに、高木護が自らの前半生を回顧しつつ創作した作品世界に、問題解決の糸口が見えるように思われる。
- (4) 3.11がもたらした直接的な衝撃には、①親しい人を突然奪われるという大きな喪失体験、②分断・離散など、共同体(家族・地域)の危機、③原発被災者(地)への差別・偏見などが挙げられる。高木護の「語り」は、逆説的な問題提起を反省的に問いかけることで、最初から何も持たない、孤独を孤独と感じないで一人で生きる、また差別・偏見を跳ね返して生きる生き方を、人々に提示して止まない。
- (5) 「無縁」と「有縁」とつながりに、“浮浪・人夫・野垂れ死”についての文学の言葉から光を当てること、で、「無縁」の中に「有縁」が、「有縁」の中に「無縁」が見えていることに気がつかされる。いつどんな時に自分は「無縁」の人間になるかも判らない。しかし、「無縁」の中にあっても、「有縁」の足がかりがある。それをつかむのは、その人の生き方の主体性と覚悟にかかっているのである。